

「今後のがん対策への期待」

前川 育

この4年を振り返り、「今後のがん対策への期待」を込めての感想

1. がん診療連携拠点病院の視察・査察の実施を

がん対策推進協議会の下に「緩和ケア専門委員会」が設置され、半年間に8回開催。ここでの論議を通じて、「治療の初期段階からの緩和ケア」という表現が「がんと診断された時からの緩和ケア」へと変わり、専門委員会での論議のまとめが、新しい基本計画の中の緩和ケアに大きく反映された。

昨年4月からは、基本計画を現場に浸透させるために、「緩和ケア推進検討会」が設置され、建設的な論議と実効策が検討されている。

そこで、がん拠点病院の現場で、実際に「がんと診断された時からの緩和ケア」が行われているか、緩和ケアチームが稼働しているか、また、相談支援センターの実態はどうか、などを視察、もしくは査察する部門を設置していただくことを提案したい。

2. がん対策基本計画を実効性のあるものに

協議会委員として以下のことを、調査・確認し、報告書を提出した。

☆緩和ケア研修会の見学

研修会の実情を知るために、2か所の研修会を見学し、その報告書を提出。

☆相談支援センターの実情調査

患者委員の有志に働きかけ、実際にその場所へ行って調査し写真入りの報告書を提出。

(相談支援センターの表示・場所・センターの職種など)

☆がん教育に関連した調査

学校医にがん教育をという論議があったので、小中学校の学校医の実態を調べて、学校医の「がん教育」に関しての参考資料として提出。

☆がん相談支援センターを患者目線で見ると

「患者が相談支援センターを探して相談をする」と仮定し、アポなしで5か所の相談支援センターを訪問し、報告。現場の悩みも聞くことができた。

3. 今まで協議会等で議題にされなかったホスピスの論議を

がん対策協議会での新基本計画の策定論議の中、あるいは、緩和ケア専門委員会の中で、いまだ論議されていないことは「ホスピス」に関する論議。

終末期や看取りといわれる分野だが、人として避けて通れない大切なこと、それは、「いのちの終わりの時」だと思う。

是非、真正面から「ホスピス論議」「看取りの時の緩和ケア」について協議会の場での活発な意見交換をお願いしたい。

4. 拠点病院内「がん患者サロン」について

全国各地に患者会は多く存在する。しかし、入院中・通院中に気軽に寄れる院内患者サロンの設置も大事だと考える。

家族にも友人にも心の内を話すことができない患者にとって、「患者サロン」で語ることで、精神的な立ち直りが可能な場合もある。

がん対策の1つの重要な柱に、是非、がん患者サロンを位置付けて論議していただきたい。

5. 患者委員を終えるにあたって

この4年間を思い起こすと、患者委員は有識者委員と立ち位置が違うことを深く認識し、緊張することなく、自信を持って発言すべきだったと感じている。

単に自分の発言が議事録に載ればそれで良いというのではなく、がん対策に生かされるための責任をもった発言ができたであろうか、と今、反省を込めて振り返っている次第である。

次期、患者委員の皆様には、是非、ご自分の周りの医療現場や患者さんの生の声を取り上げていただきたいと願っている。

そのための患者委員でもあるので、次期患者委員の皆さまの、率直なご発言と行動力を期待している。

6. 終わりに

がん対策推進協議会は、国のがん対策を進める中心軸。その責任と役割はますます高まってくると思います。

門田会長はじめ次期協議会委員・事務局の皆さま方の益々のご活躍・ご健闘をお祈り申し上げます。

また、この4年間で多くの学びをさせていただきましたことに、心から感謝申し上げます。